

その 13 の 2

真間の手児奈

「帯解き替へて」



市川民話の会「真間の手児奈」

勝鹿の真間の娘が墓に過る時に、山部宿祢赤人が作る歌(并せて短歌)

「古に ありけむ人の 倭文機(しつはた)の 帯解き交(か)へて 廬屋(ふせや)建て 妻問ひしけむ

勝鹿の 真間の手児名が 奥(おく)つ城(き)を こことは聞けど 真木の葉や 茂りたるらむ 松が根や
遠く久しき 言(こと)のみも 名のみも我は 忘らゆましじ」

山部赤人(巻 3・431)

拙稿『万葉～古から今へ』は、たまたまNHK「日めくり万葉集」を担当したドキュメンタリー畑のプロデューサーが、畑違いの万葉集の魅力に取り込まれ、以来不遜にも「万葉集宣伝係」を自称して活動してきた記録であり、その時々に触れてきた「万葉集ナウ」をまとめたものである。従って、万葉集に関しては専門的な知識があるべくもなく、国語学や国文学についても全くの門外漢の万葉集論であり、むしろ、畑違いであるが故の先入観のないフリーな目線、ナウな切り口で万葉集をとらえたい、というのが本稿のねらいである。とは言っても、万葉集を「宣伝」するに当たって、見当違いの読み解きや基本的な間違いを犯すわけにはいかないので、原稿の監修役を、高岡市万葉歴史館の坂本信幸館長にお願いした。坂本館長には、館長が奈良女子大学大学院教授の時、「日めくり万葉集」の番組監修をお願いし、その後大学を退官した後、万葉歴史館長に就任されてからも、館長との共同企画で、高岡で家持の舞台を制作し、私が企画、脚本を担当した時も監修を引き受けていただいた。いわば、私にとっての万葉学の恩師であり、パートナーでもある。そこで、引き続き、館長の迷惑も顧みず本稿の事前のチェックをお願いした次第である。ところが、最近館長が体調を崩されたことから、当面事前チェックをお願いすることを控え、サイトを更新してから体調のいい時に査読してもらうことにしていた。

そして、4月の原稿をアップしてからしばらくして、館長からメールが入った。いくつか書いてくれた感想の中に1つ、「間違いあり」の指摘があったのである。<「その13～東国の高橋虫麻呂と山部赤人」の箇所で、「昔男が妻屋を立て、そこで手児奈と互いに帯を解きあって共寝をした、として、手児奈伝説を身も心も清らかなまま身を投げた、単なる乙女伝説としてはとらえていないのである」というのは、間違っています>。そして、

その後、＜そのことについては私の論文「倭文機の帯解き替へて—山部赤人の真間娘子の歌の解釈をめぐって」に書いています＞とあった。

早速その論文を拝読したところ、坂本館長の指摘は、一言で言えば、論文のタイトルにあるように、「帯解き替へて」をどう読み解くか、に尽きる。しかし、私が使った訳文（冒頭の長歌）は、「帯解き交へて」と訳されており、今回の指摘に正直多少の戸惑いを覚えた。確かに、この「帯解き替へて」の解読については研究者の間で議論があったことは承知していた。しかしごく素直に読むと互いに帯を解きあって「共寝」をした、と受け取って問題ないと思われたし、それが通説として受け止められてもいた。

ちなみに、中西進氏の『万葉集 全訳注』（1978 年刊、講談社）も、この部分を、＜倭文機の帯をときあい、小さな妻屋を作って愛を交わした＞とあり、つまり、共寝をしたと訳している。他の多くの文献も概ね共寝説である。

例えば、同じテーマを扱った、胡志昂埼玉学園大学教授の論文「真間の手児奈伝説歌を巡って」（1999 年執筆）は、「はじめに」で、＜勝鹿の真間の手児奈伝説を詠んだ歌の中で、赤人歌と虫麻呂歌に詠まれた手児奈の形象が可成り食い違うので、従来様々な議論を呼んできた＞と書いた上で、赤人の作歌の表象はいくつかの焦点に絞られるとして、その 1 番のポイントとして、「帯解きかへて」を挙げている。

＜先ずは「古に 存りけむ人の 倭文機の 帯解きかへて 伏屋立て 妻問いしけむ」という伝承された妻問の光景。中でも「帯解きかへて」は男と女が互いに着物の帯を解き放つ生々しい愛の描写で、虫麻呂の歌った手児奈と全くイメージが違う。従来これを単に「伏屋立て」にかかる序詞とする見解がある（山田孝雄『万葉集叢書考』など）一方で、それを実質的意味を有する表現とし（澤瀉久孝『万葉集注釈』など）、更には手児奈が複数の男と結婚したとする見方もある（賀茂真淵『萬葉考』、土屋文明『万葉集私注』など）。これら諸説に関して夙に注釈に詳論されている。従ってこの「妻問」は只の求婚に止まらず、共寝をする媾婚を意味すると考えてよい。また賀茂真淵は土地の風俗、土屋文明は当時の婚姻形態から手児奈が複数の男性と結婚していたとし、これが近時史学の立場からも注目されていることは留意すべきであろう（関口祐子『処女墓伝説考』）。このように昔男が手児奈と小さな妻屋を作って倭文織の帯を互いに解き合っ
て愛を交わした情愛の光景が赤人の歌った第一点である＞。

過去の著名な万葉学者の説なども引用しながら、きわめて分かりやすく真っ当な論、いわゆる通説であると思われたが、坂本館長は、そのような通説に「異議」を申し立て、「倭文織の帯を互いに解き合っ
て愛を交わした」と解するのは、「間違い」であると指摘するのである。年代的には、この胡論文の 4 年前になるが、1995 年に執筆されたこの論文の最後で、坂本館長は、＜『注釈』（澤瀉久孝）のいうように「手児名は男と逢った」のではないのである。『私注』（土屋文明）のいうように「幾人かの男に婚したと解すべき」ではないのである＞と断言している。今から 30 年近く前に、それまでの通説である「共寝」説に真っ向から異を唱え、「倭文織の帯を互いに解き合っ
て愛を交わしたのではない」と読み解いたのである。

「共寝」説に乗った私としては、この論文を読んで、万葉集研究の専門家が万葉歌をいかに読み解き、いかにしてそのような結論に至ったのか、ドキュメンタリーを見るようにきわめて興味深いものがあった。

坂本論文はかなりの分量もあり、歌の文言などについては詳細な専門的分析もあるため、できるだけわかりやすく、そのポイントを抜粋する形で、その概略を紹介したい。（以下、〈 〉内は、坂本論文の引用部分。（ ）内は、筆者の補足）。

坂本論文は、まず江戸時代の 2 人の万葉学者の文献を引用して、赤人歌と虫麻呂歌は、その内容が異なっており、当時の注釈書のほとんどは、いわゆる「共寝」説をとっていることを認めている。

〈この歌（赤人歌）の解釈については、従来より若干の問題が存した。それは、「倭文機の帯解き替へて 廬屋立て妻問ひしけむ」のところの解釈である。ここのところ、『万葉集管見』（下河辺長流）では「帯ときかへてとは、男と女とあふ時、共に帯をとく心なり」としたのであったが、それを受けた『万葉代匠記』（契沖）では「帯解替テト云ヘルハ、語ラヘル男有ヤウニ聞ユ。第九ノ哥（虫麻呂歌）ハ定タル男ナシト見ユ。異義ニヤ」と述べて、共に帯を解くのでは言い交わす男があることになり、虫麻呂歌の中に詠まれた真間の娘子と、内容が相違する旨を指摘、「異義」であるかと疑った〉

そして、坂本館長は、その解釈をいったん認めた上で、この共寝説に異なる解を示した文献もあることを例示するが、それに対しても、果たしてそれでいいのかと、さらに疑問を呈している。

〈現在の注釈書はおおむね「帯をときかはしての意」と解し、「古にありけむ男は倭文機の帯解きかはして寝たのである。手児名は男に逢つたのである」（仙覚『万葉集注釈』）と理解する。しかしながら、この解に疑問を差し挟み、異なる解を示した注釈書もないわけではなかった。例えば、『万葉集残考』（高井宣風）では「けそう人、帯をとき、衣服をかざりて、つまどふと也」と述べ、安藤野雁の『万葉集新考』では「娚（ツマトビ）の禮代（トヤシリ）に男女の帯を互に解替して贈り納るゝ古への習にや有けむ」と述べ、さらに井上通泰の『万葉集新考』では、（略）新しい倭文の帯に替えての意と解すべき旨を述べた。（略）しかしながら、それぞれ説得力に欠け、結局は『注釈』（澤瀉久孝）に述べるような解に最近の注釈書は落ち着いて来ていると言った次第である。しかしながら、果たしてそのような解でいいものであろうか〉

そこで、坂本論文は改めてこれまでの解釈に対して、2 つの疑問を提起する。

〈『注釈』（澤瀉久孝）などの解釈に対しての疑問のまず第一点は、既に問題になっているように、虫麻呂歌との内容の相違である。（略）赤人歌と虫麻呂歌とは伝承する伝説自体が相違したものとされるけれども、同じく都人である赤人と虫麻呂が異なる伝説によって歌を作ったとは、宮廷人と考えられる享受者の側の理解の問題からして首肯しがたい。ことは、伝説内容の根本に関わる問題であるのに、それが正反対の形で都に伝承されていたとは到底考えがたい〉

〈疑問の第二点は、もし諸注釈のいうごとく赤人の伝え聞いた伝説が男と寝たという内容の伝説であったと

した場合、赤人の歌における手児名伝説は、「昔いた人が帯を解きかわして寝た勝鹿の真間の手児名」というだけのことであって、伝説として伝えられる理由が認められないのである。単に男と寝ただけの女が、いかに自殺をしたからといって、伝説化され、歌になるであろうか。女が女としてある限りにおいて、男と寝ることは自然のことであり、それが伝説の内容となることはあり得ない。つまり、これでは歌にならないのである。（略）万葉集中の他の伝説と同様に、複数の男に求婚される中で死を選んだ美女、という典型的な古代の人々の好んだ伝説内容であったと考える方が理にかなっている。『注釈』などの説には従い難いのである＞

＜それでは、どのように解すべきであろうか。従来のように、「倭文機の帯解き替へて」を「帯を解きかわして」と解すのでは、解釈できない。これは「帯解替而」の文字通り、「帯を解いて、替えて」の意に解すべきでないのか＞

＜帯を結ぶのは、男女の間にあつては互いの貞節を守ろうという誓いの行為であったわけで、逆に帯を解くのはその誓いを破る行為となつたはずである。つまり、この歌で「帯解き替へ」た男は、妻と貞節の誓いのもとに結び合った帯を自ら解き替えて、つまり、妻を捨てた上で、廬屋を立てて真間の手児名に求婚したのではなかったか＞

＜つまり、赤人歌の問題の「倭文機の帯解き替へて廬屋立て妻問ふ」の表現は、虫麻呂歌の「夏虫の火に入るがごとく湊入りに 船漕ぐごとく行きかぐれ人の言ふ」の表現と対応するわけであり、同じ様な意味を持つべきはずである。彼此その表現は相違するけれども、その骨子としては、男どもの尋常ならざる手児名に対する求婚の様子であったはずである。それを、虫麻呂歌では、火に集まる虫のごとく、漁を終えた船が一齐に湊に入ってくるごとく異様に多くの人が言い寄るという形で表現したのに対し、赤人歌では、妻のある男までもが、前もって妻との関係を絶ち、廬屋を立てまでして求婚したという形で表現したのであろう。おそらく、男どもの妻問いのはなはだしい状態を伝える中に、数多くの男どもの求婚はもちろん、中には妻と別れてまで手児名に執心する者がいたという伝説内容が伝えられていたのであろう。「昔イタ聞ク男ガ妻ト別レテ、廬屋マデ立テテ求婚シタトイウホドノ勝鹿ノ真間ノ手児名」というわけである。伝説の娘子への男どもの求婚を歌った歌の中で、虫麻呂の「上総の末の珠名娘子を詠む一首」には、「さし並ぶ隣の君はあらかじめ己妻離れて乞はななくに鍵さへ奉る」とそのはなはだしさを歌ったものが見える。これは、赤人が手児名伝説に歌った方面の男どもの尋常ならざる求婚の様態を、虫麻呂的アレンジでもって珠名伝説において歌ったのであろう＞

＜ここでは、（略）古にあつて特に妻と別れてまで手児名に心を寄せて求婚した男を歌って、それほどまでに男どもに言い寄られた手児名を歌ったものと思われる。以上の考察に明らかなように、『注釈』（澤瀉久孝）のいうように「手児名は男と逢つた」のではないのである。『私注』（土屋文明）のいうように「幾人かの男に婚したと解すべき」ではないのである。数多の男どもに求婚されながら、男と逢うことなく、自らの命を絶った。それ故、そのあわれな娘子は伝説の主人公となりえたのであった＞

以上が、坂本論文の骨子である。つまり、倭文機の帯解き替へるほどに手児奈に心惹かれ求婚した。虫

麻呂の末の珠名の歌にあったように、隣の男が妻を捨て家の鍵を珠名に奉ったように、倭文機の帯解き替へることで男は妻を捨て手児奈に言い寄ったのである。とすると、赤人歌と虫麻呂歌は、確かに平仄があうのである。

坂本論文を読んで、万葉学者が長年にわたって蓄積した専門知識を駆使して多角的に検証し推論を進めていく道筋には目を開かれる思いがする。通説に対し新たな見方、新たな読み解き方を提起し、きわめて説得力があり納得するところは多かった。何よりその切り口が面白いのだが、さりとて、多くの万葉学者が解釈している共寝説、いわゆる通説も捨てがたいことも確かである。私たち、万葉集の読者は、専門家が様々な角度から検証した解釈を学ぶことで、より深く万葉歌を理解し、より万葉びとの心と暮らしに近づくことができるのだろう。そして、万葉集を読む楽しみがより一層広がるのである。

坂本論文は、同じ都人である赤人と虫麻呂が異なる伝説によって歌を作ったとは思えない、としているが、手児奈伝説には、これまでいくつか異なる伝承が残されていることも確かである。手児奈霊神堂は、手児奈伝説について、次のように説明している。

「手児奈の物語は、美人ゆえ多くの男性から求婚され、しかも自分のために人びとの争うのを見て、人の心を騒がせてはならぬと、真間の入江に身を沈めたとか、継母に仕え真間の井の水を汲んでは孝養を尽くしたとか、手児奈は国造の娘でその美貌を請われ、或る国の国造の息子に嫁したが、親同士の不和から海に流され、漂着した所が生まれ故郷の真間の浦辺であったとか、さらには神に仕える巫女であったりする等、いろいろと形を変えて伝えられている」。

手児奈伝説の地元市川の「市川民話の会」の湯浅止子さんも言う。「手児奈伝説は、その他にも水汲み娘の総称とか、美しいアイヌの娘説までいろいろありますが、赤人や虫麻呂も想像の世界を歌に詠んだのでしょ。万葉ファンタジアの空想の世界も素敵です。民話の伝承は、子供たちにとって大事な心の寄りどころと考えています。民話の会は、土地の人の伝承を大事にし、先人の生きた証や歴史などに、さらに子供たちの想像力を加味して聞いてほしい、と活動しています」。

最後に坂本館長に 30 年近く前の論文について、万葉集ナウ、今どう考えているのか尋ねた答えはこうだ。「従来の説は、『帯解替而』の『替』の字が正訓字であることを考えずに、字義に合わない『交わす』意の『交フ』と間違っ解してしまったところに間違いがありました。また、男女が貞節の誓いとして帯を結び合うという習俗が当時あったことも考慮せず、賀茂真淵や澤瀉久孝といった大家・権威の説を無反省に継承して来たことに問題があったのです。幸いこんにち私の説は大方の認めるところとなってきています。真間娘子の汚名は注いだといえるでしょう」

また 1 つ、恩師から万葉集を読むことの面白さを教えられた。

それはさておき、万葉歌を読み「解く」のは、女人の帯を「解く」のにまして、難しいことじゃなあ（？）。

